M.ヒンデル原案の秩父宮ヒュッテ(現空沼小屋)の建設経緯と建築概要について

THE BUILDING PROCESS AND OUTLINE OF THE PRINCE CHICHIBU'S LODGE (PRESENT SORANUMAKOYA LODGE) DESIGNED BY MAX HINDER

角 幸博 —*1

キーワード：
北海道, マックス・ヒンデル, スキーヒュッテ, ログキャビン, 近代建築資料

Keywords:
Hokkaido, Max Hinder, Ski lodge, Log cabin, Documentation of modern architecture

Yukihiro KADO —*1

This report clarifies the process until constructing Prince Chichibu's lodge built in 1928, construction costs, amount of using wood materials, the original plan and its composition which Max Hinder had designed and the Hokkaido university made drawings, based on the documents and drawings which belong to Hokkaido University.

This lodge is evaluated one of the existing works that expresses the style of Max Hinder and is the last work of his skiing lodge trilogy having produced a big influence on the lodge of Hokkaido afterwards, though it has not superior space composition too much.

1. はじめに

建築家マックス・ヒンデル(1887-1963)の経歴及び作品活動で、ティネパラダイスヒュッテ(1926)、ヘルヴェチアヒュッテ(1927)、秩父宮ヒュッテ(1928)のヒュッテ3部作があることは既報¹⁾で述べた。

近年、北海道大学施設部に保管されている図書類中に、『昭和参年度 空沼ヒュッテ新築工事二関スル書類 営繕課』綴り、および『昭和3年空沼小屋設計・施工関係図 書類 スイス人原図同封 無意根小屋設計図在中 要保存』1袋が保管され、マックス・ヒンデル(以下ヒンデル)の原案と考えられるスケッチA2版3枚(1、2階平面、断面)、営繕課作成図面(『空沼小屋御設計図』1枚)と関連書類を見出すことができた。また図面中に「SKI HÜTTE AM KARANUMA FÜR S.K.H.PRINZEN CHICHIBU. QUERSCHNITT」とタイトル²⁾をつけ「ARCHITEKT MAX HINDER, YOKOHAMA」の署名入りの断面図が1枚保管されていた。これまで、本ヒュッテに関する資料としては、『山とスキー』(第89号, 1929)掲載の「SKI HÜTTE AM KARANUMA FÜR S.K.H.PRINZEN CHICHIBU.」(図-1)と題した立面および1階平面図が知られているのみであった。本図には署名はないが、タイトルの書体などは、上記断面図と同一であり、一連のヒンデル案と見ることができる。後述の建物概要とは基礎仕様や入り口回り、小屋組などが異なるので、初期案としてよいであろう。

本稿は、これらの新史料をもとに、秩父宮ヒュッテ建設の経緯・工程、使用材量、建物概要について報告するものである。

2. 秩父ヒュッテ建設経緯と沿革

札幌市南区空沼岳、万計沼北側湖畔に所在する空沼小屋は、当初秩父宮ヒュッテ(写真-1)として創建された。1928年2月、厳冬の北海道視察を目的としてはじめて来道した秩父宮は、20日上野駅を出発し、21日函館から札幌三井別邸に宿泊した。22日、午前中札幌神社、北海道庁、北海道帝国大学、植物園を縦覧のち、午後は三角山で開催の北大スキー部競技会を観覧、翌日のスキー練習後、24日手稲山スキー登山を北大スキー部員とともにたん能した³⁾。

当時のスキーは学生だけのスポーツで、警察や憲兵隊にスキー技術のあるものはいなかったため、登山時の警護はすべて北大スキー部に委嘱された。その夜はティネパラダイスヒュッテに宿泊、そこで自身のヒュッテ建設の希望があったという⁴⁾。

秩父宮ヒュッテ候補地選定並びにプラン作成の命を受けた大野精七北大スキー部長(1885-1979)⁵⁾は、候補地を空沼岳万計沼ほとりと定

図-1 秩父宮ヒュッテ案 『山とスキー』第89号

写真-1 秩父宮ヒュッテ
(『北海道大学所蔵国有財産沿革
十二冊の内其十一』)

*1 北海道大学大学院 教授・博士(工学)
(〒060-8628 札幌市北区北13西8)

*1 Prof., Graduate School of Eng, Hokkaido Univ., Dr. Eng.

め、プラン作成をヒンデルに依頼した。ヒンデルは、妹婿ハンス・コラー(1885-1925)を通じて、大野部長と親しく、またティネパラダイスヒュッテ⁶⁾の無償の設計や、ヒンデルらの個人ヒュッテであるヘルヴェチアヒュッテ⁷⁾の設計者として知られていた。同年7月末にヒンデルのプラン完成とある⁸⁾ので、前述の『山とスキー』第89号掲載図面(図-1)はこの際のものと考えられる。

8月初旬大野部長が宮家を訪問、8月25日宮家から建設決定の電報があり⁹⁾、8月28日工事一切を北大で司るよう書面があり、「御手許金を直接北大へ下賜」¹⁰⁾されることとなった¹¹⁾。9月10日ヒンデルの來札を待ち¹²⁾、建設地検分が実施され、ほぼヒンデルの原案とおりに建設されることになった。史料内に同封の図面(図-3)は、ヒンデルの原案(図-2)を基に、北海道帝国大学営繕課課長萩原淳正、雇村井栄吉、雇原源太郎らが製図したものと考えられる¹³⁾。

工事は、伊藤亀太郎¹⁴⁾が請負、9月18日付けの見積り額は9,740円であった。その後変更、訂正で調整し、5,500円と見積もられた。表-1は変更前、表-2は訂正後で、変更事項は、混凝土・根堀・割栗石・モルタル塗・鉄板葺、仮枠を廃止、伐開は伊藤組負担、松・雑木製材および各運賃を0、屋根桁を並1分に変更、煙突別途、釘鉄物一式や大工・爲人夫、小屋掛などの単価軽減、損料諸雑費の減額などで対応した。

1929年1月15日付「秩父宮ヒュッテ新設工事費調書」によれば、6,571.46円、店員出張費、堂本駒吉¹⁵⁾賃金を含むと6,947.46円となるから、1,447.46円は伊藤亀太郎(伊藤組)側の持ち出しということになる。施工監督は、伊藤組の現場代人井上亀之助が、監理は原源太郎が担当と考えられる¹⁶⁾。

ほかに、鉄板製ストーブ、煙突取り付け工事代金70.79円が別途請求されている。また、藁布団一人用16枚、二人用2枚は、北海道帝国大学病院で作製とある。

伊藤組からの(工事)請書は9月24日、9月28日着手届が提出されているが、帝室林野局宛「木材交付願」案は10月4日付書類で決済されているので、建設用木材、下小屋仮設用材、燃料薪材無償交付については、願提出以前に許可されていたものとも考えられる。工事は、伊藤組が9月28日提出の工程表¹⁷⁾通りに進まなかったようだが、10月17日地鎮祭、11月26日上棟式、12月10日竣工した¹⁸⁾。設備品としての布団や、毛布、炊事具などは15日までに備え付けられた。

翌1929年1月22日～25日まで高松宮がヒュッテに宿泊、24日「空沼小屋 Soranumakoya」と命名した¹⁹⁾。『空沼ヒュッテ書類』綴り中の工事概況報告草稿²⁰⁾は、このヒュッテ開きの際に備えたものと考えられる。翌1930年2月11日から一般解放され²¹⁾、1947年2月17日北大に寄贈された²²⁾。8.46aの小屋敷地は、秩父宮家と帝室林野局との無償貸付契約が切れた1948年7月以降有償貸付に変更されている²³⁾。

3. ヒュッテの建築概要

梁間24尺×桁行21尺の主屋に24尺×4尺の下屋を付属した2階建てヒュッテで、1階16.67坪、2階14坪、延べ30.67坪のいわゆるログキャビンである。ヒンデルのスケッチである1階、2階平面、断面図(いずれも1/20)と比較すると、板厚など部分的な変更はあるものの、大要はヒンデル案を踏襲している。「maruta mo ides」との記入も「丸太ニテモ可」と丁寧に訳されて添付されている。

1階は北側の下屋中央から入り、東側を「御薪木置場」、西側を「御

表-1 秩父宮ヒュッテ工事見積内訳(変更前)

名 称	摘 要	員 数	単 価	小 計
造 形	坪	30.670	0.500	15.340
伐 開	坪	26.000	0.600	15.600
盛 土	立坪	3.000	4.200	12.600
根 堀	〃	11.000	3.600	39.600
割 栗	〃	2.500	13.000	32.500
混凝土	〃	2.800	420.000	1176.000
モルタル塗り	面坪	4.000	10.000	40.000
山焼材	原木伐採、木挽、敷出小運搬運付共	300.000	900.000	2700.000
松製材	札幌ヨリ石山駅迄ノ運賃共	14.000	1450.000	203.000
全現場迄運賃	石	14.000	1230.000	172.200
雑木製材	札幌ヨリ石山駅迄ノ運賃トモ	20.000	2300.000	460.000
全現場迄運賃	〃	20.000	1590.000	318.000
鉄板張	30#張手間共	71.000	3.000	213.000
屋根桁葺	二寸足	42.000	3.600	151.200
鉄 物	〃	66.000	1.300	85.800
釘	〃	25.000	1.300	32.500
建 具	一式			420.000
浅口煙突	一式			76.000
大 工	坪	2.000	45.000	90.000
爲人夫	〃	30.670	9.000	276.030
仮 枠	一式			140.000
食料補助	坪			550.000
小屋掛	ヶ月	40.000	7.000	280.000
現場費	3		130.000	390.000
諸損料雑費	足代費用共	一式		620.480
合 計				9740.000

表-2 秩父宮ヒュッテ工事見積内訳(変更後)

名 称	摘 要	員 数	単 価	小 計
造 形	坪	30.670	0.500	15.340
盛 土	立坪	3.000	4.200	12.600
山焼材	石	300.000	900.000	2700.000
フェルト張	坪	35.000	0.6000	21.000
屋根桁葺	〃	36.500	2.500	91.250
釘鉄物一式	〃	45.000	1.300	58.500
建 具	式	1		420.000
大工	坪	30.670	28.000	858.760
爲人夫	〃	30.670	8.000	245.360
食料補助	坪			550.000
小屋掛	坪	40.000	5.000	200.000
諸損料雑費	式	1		322.190
足代費用共				
計				5500.000

踏込」「御廁」とし、扉を隔てて「御広間」(6×10尺)、東隣は戸棚、机を挟んで「御厨房」(6×11尺)である。「御厨房」には、長さ7尺5寸、直径1尺7寸の丸太半割材を使用した流しが置かれていた。

居間ともいふべき「御休憩所」は、中央に大ストーブを置き、東西に「御寝台」(シングル)と造り付けの腰掛・「机」を並べ、南西正面に「机」とコの字型の「腰掛」を造り付け、左右は「御寝台」(ダブル、6×7尺)である。「御休憩所」上部は吹き抜けており、中央ストーブで上階まで暖房する。

「御休憩所」北側壁面に備えた直梯子で上り下りする2階は、中央の吹き抜け(12×6尺)と板敷き踊場、および1尺ほどの通路をはさみ、東西両側は通路側に約1.5度の勾配をつけた板張りの「御寝台」が設けられていた。

断面図では、土居葺き(厚1分の桎(簡素なこけら)葺き)の切妻屋根は8寸勾配、野地板7分板、棟押さえ(木棟)は末口7寸長さ32尺の丸太、棟木は末口1尺28尺の丸太を指示している。垂木(2×5寸)は、調書によると20尺長を48本、鼻桁(5×7寸)28尺、1、2階根太断面2×4寸、2重床板6分厚、上床板8分厚、1、2階天井板6分厚、「御休憩所」4隅の通柱は6寸角、長さ17尺、挟梁(6×4寸)とボルトで緊結されていた。

外壁の積材木は、外側の丸肌を残した7×5寸材を主として使用し、積木上下に実(2×1寸)材を挟み込んだ。使用木材は、全部で294.279石であった。北大営繕課長萩原淳正から帝室林野局沖野技師にあてた昭和3年11月30日付け材料調書には使用木材が一覧されている。これまで、ヒンデル設計のヒュッテに使用された材数を具体的に示した史料は見あたらず、また建築部位ごとに本数まで記載されているものなので、あらためて表-3として掲載した。

表-3 材料調書

名 称	寸 法	員 数	単石数	小 計
地 板	10尺 末口1尺	8	0.956	7.648
”	9尺	6		5.162
”	8尺	4	0.8604	3.059
”	7尺	6	0.7648	3.445
根 機	27尺 6寸×3寸	2	0.5742	0.972
”	33尺	3	0.486	1.242
”	26尺	4	0.414	1.872
”	21尺	1	0.468	0.378
”	12尺	1		0.216
”	6尺	3	0.294	0.108
土留木	7尺 7寸×6寸	18	0.315	5.292
”	7尺5寸	33	0.252	10.395
”	6尺	11	0.210	2.772
”	5尺	28	0.168	5.880
”	4尺	10	0.315	1.680
”	3尺 7寸×4寸5分	6	1.764	1.890
土台(行間)	28尺 7寸×9寸	2	2.5515	3.528
”(梁間)	27尺 1尺5寸×9寸	2	1.134	5.103
”	12尺	2		2.268
”(間仕切)	24尺 7寸×7寸	1	0.735	1.176
”	15尺	2	0.490	1.470
”	10尺	2	0.343	0.980
”	7尺	4	0.294	1.372
土 台	6尺 7寸×7寸	6	0.196	1.764
”	4尺	3		0.588
”	3尺	1	1.0395	0.147
行間障木	27尺 7寸×5寸	8	0.25025	8.316
”	6尺5寸	4	0.1001	1.001
”	2尺6寸	8	0.077	0.801
”	2尺	8	0.25025	0.616
”	6尺5寸	12	0.32725	3.003
”	8尺5寸	12	1.0395	3.927
”	27尺	2	1.001	2.079
”	26尺	2	0.94325	2.002
”	24尺5寸	2	0.8855	1.887
”	23尺	4	0.94325	3.542
”	24尺5寸	2	1.001	1.887
”	26尺	2	1.05875	2.002
”	27尺5寸	2	1.001	2.118
”	26尺	3	0.385	3.003
”	10尺	12	1.001	4.620
”	26尺	2		2.002
”	27尺5寸	1		1.059
”	29尺	1		1.117
”	30尺5寸	1		1.174
”	12尺5寸	4	0.4835	1.925
梁間障木	12尺 7寸×5寸	4	0.462	1.848
”	11尺	4	0.4255	1.698
”	10尺	4	0.385	1.540
”	9尺	4	0.3465	1.386
”	8尺	4	0.308	1.232
”	21尺5寸	2	0.82775	1.656
”	20尺	2	0.770	1.540
”	18尺	2	0.59675	1.386
”	15尺5寸	2	0.693	1.078
”	14尺	2	0.462	1.078
”	12尺	2	0.529	0.924
”	11尺	2	0.4235	0.847
”	8尺5寸	2	0.32735	0.655
”	7尺	2	0.2695	0.539
”	5尺5寸	2	0.2275	0.424
”	4尺	2	0.154	0.308
”	11尺	18	0.4235	7.623
”	28尺	1		1.078
下家ノ界	30尺5寸 4寸5分×7寸	1		0.961
”	29尺	1		0.941
”	27尺5寸	1		0.866
”	26尺	1		0.819
”	6尺	10	0.189	1.890
”	5尺5寸	10	0.17325	1.733
”	8尺5寸	5	0.26775	1.339
”	3尺	12	0.0945	1.134
下家三角	4尺 7寸×4寸	4	0.112	0.448
”	2尺5寸	2	0.070	0.140
中間間仕切	7尺	30	0.196	5.880
”	7尺	6	0.098	0.588
”	6尺	21	0.168	3.528
”	3尺	33	0.084	2.772
”	10尺	1		0.280
2階受兼腰掛台	9尺	10	0.252	2.520
”	7尺	10	0.196	1.960
化粧鼻木	1尺	46	0.028	1.228
”	1尺5寸	4	0.042	0.168
入口地覆	5尺 1寸×5寸	1		0.250
物置地覆	4尺 1寸×6寸	1		0.240
階段木	4尺 1尺2寸×5寸	3	0.240	0.720
入口柱	8尺5寸 6寸×6寸	2	0.306	0.612
”	5尺	1		0.180
各室敷居	3尺 6寸×2寸	2	0.036	0.072
”	2尺5寸	2	0.030	0.060
窓台及	5尺 6寸×6寸	4	0.180	0.720
”	4尺	4	0.144	0.576
”	6尺	6	0.216	1.296
”	3尺	2	0.108	0.216
”	2尺2寸 3寸×6寸	4	0.396	1.584
窓 柱	3尺 6寸×6寸	16	0.108	1.728
”	” 6寸×3寸	4	0.054	0.216
各入口柱	7尺5寸 6寸×6寸	12	0.270	3.240
中 柱	8尺	2	0.288	0.576
通 柱	17尺	4	0.612	2.448
階上付框	5尺5寸	4	0.198	0.792
”	8尺5寸	4	0.300	1.200
下壁垂木掛	14尺 5寸×2寸5分	2	0.175	0.350
” 附 押	14尺 7寸×1寸	2	0.098	0.196
” タル斗	7尺 4寸×2寸	25	0.056	1.400
” 鼻 隠	28尺 5寸×1寸	1		0.140

名 称	寸 法	員 数	単石数	小 計
” 広小舞	28尺 4寸×1寸3分×7分	1		0.140
下家破風	7尺 6尺3分×1寸2分	2	0.0546	0.019
登り梁	” 3寸×1寸3分×7分	2	0.042	0.084
” 野地板	” 7分	坪6	0.252	1.512
鼻 括	28尺 5寸×7寸	2	0.980	1.960
屋脊母屋	” 末口1尺7寸ダイゴ	2	2.352	4.704
”	26尺5寸	2	2.226	4.452
機 木	28尺 末口1尺	1		3.456
木 機	32尺 ” 7寸	1		2.528
釣機束	9尺 6寸×6寸	2	0.344	0.688
”	7尺	2	0.252	0.504
狭 梁	16尺 6寸×4寸	4	0.384	1.536
片側隠兼野鼻	” 5寸×2寸	13	0.160	2.080
全 受	9尺 末口4寸	4	0.140	0.576
”	6尺	8	0.096	0.768
鼻 隠	28尺 5寸×1寸	2	0.140	0.280
垂 木	20尺 5寸×2寸	48	0.200	9.600
広小舞	28尺 5寸×1寸3分×7分	2	0.070	0.140
破 風	21尺 1尺×1寸2分	4	0.252	1.008
登り梁	” 3寸×1寸2分×7分	4	0.126	0.504
野地板	24尺 ” 7分	坪35	0.252	8.820
泥障板	15尺 1尺×1寸2分	4	0.180	0.720
下家ノ下附木	24尺 6寸×3分	1		0.432
根 太	9尺5寸 4寸×2分	9	0.076	0.684
”	6尺5寸	9	0.052	0.468
”	11尺	4	0.088	0.352
”	13尺 4寸×2寸	4	0.104	0.416
”	10尺	4	0.080	0.320
”	4尺5寸	2	0.036	0.072
”	4尺	4	0.032	0.128
二重床板受	9尺5寸 3寸×1寸	4	0.0285	0.114
”	6尺5寸	12	0.0195	0.234
”	12尺	4	0.036	0.144
二重床板	” 並 6分	17	0.180	3.060
登り床板	” 3寸2分×8分	20	0.288	5.760
二階欄太掛	11尺 7寸×4寸	2	0.588	1.176
踊場欄太受	10尺 6寸×2寸	2	0.120	0.240
根 太	8尺5寸 4寸×2寸	14	0.068	0.952
”	7尺	16	0.056	0.896
”	10尺	2	0.080	0.160
”	6尺	8	0.048	0.384
根太鼻隠	13尺 6寸×1寸	2	0.078	0.156
”	6尺5寸	2	0.039	0.078
床 板	” 3寸2分×正8分	坪14	0.288	4.032
一階天井板	” 5寸×並6分	” 13	0.180	2.340
下家天井板	” ”	” 2	0.180	0.360
二階天井板	” 5寸×並6分	” 18	0.216	3.888
二階手摺受柱	9尺 末口3寸	2	0.128	0.256
手摺受	8尺 4寸×4寸	2	0.128	0.256
”	5尺5寸	2	0.088	0.176
” 受束	1尺2寸	4	0.0192	0.077
手 摺	12尺5寸 末口4寸	2	0.160	0.032
”	5尺5寸	1		0.070
卓子足	2尺5寸 2寸×2寸	12	0.010	0.120
” 吸付棧	3尺 2寸×3寸	3	0.018	0.054
”	2尺	6	0.012	0.072
足元貫	5尺 2寸×1寸2分	6	0.012	0.072
”	2尺5寸	2	0.006	0.012
”	1尺5寸	4	0.00315	0.013
方 杖	3尺 1寸5分×1寸5分	6	0.00675	0.041
” 板	6尺 1尺5分×1寸	7	0.063	0.441
腰掛足	1尺5寸 2寸×2寸	17	0.006	0.102
” 吸付棧	1尺5寸	19	”	0.114
” 板	10尺 1尺5寸×1尺2分	1		0.156
”	6尺	2	0.0936	0.187
”	6尺5寸	4	0.1014	0.406
腰室欄板	6尺 8寸×8分	2	0.0384	0.0768
”	3尺	2	0.0192	0.038
階上ノ腰掛板	9尺 8寸×8分	2	0.0576	0.115
”	7尺	7	0.448	0.179
” 腰懸欄板	9尺 1尺×8分	2	0.072	0.144
”	7尺	4	0.056	0.224
” 持送板	1尺 8寸×1寸	8	0.008	0.064
各天井四分一木	12尺 1寸×1寸	24	0.012	0.288
腰室欄段受木	6尺 均4寸	2	0.096	0.192
”	3尺	2	0.048	0.096
炉 鼻	4尺5寸 5寸×1寸2分	4	0.027	0.108
椅子方板	10尺 7寸×2寸	2	0.140	0.280
踏 板	1尺8寸 6寸×1寸5分	6	0.0162	0.097
流 材	7尺5寸 1尺7寸ニツ割	1		0.768
” 受	1尺8寸 末口6寸	2	0.05182	0.104
” 束	1尺5寸 末口4寸	2	0.0192	0.038
下須欄板	6尺 1尺×1寸2分	7	0.072	0.504
”	4尺	13	0.048	0.624
” 蓋板	1尺5寸 5寸×7分	9	0.00525	0.047
” 同板	” 1寸5分×7分	10	0.001575	0.016
軒裏天井板	12尺 4寸5分×8分	4	0.0432	0.173
”	12尺 5寸×5分	15	0.030	0.450
木口隠	12尺 7寸×1寸	4.5	0.084	0.378
天井受棧	12尺 2寸5分×2寸5分	7	0.027	0.189
四分一木	12尺 1寸×1寸	12	0.012	0.144
押入柱	8尺 3寸×3寸	2	0.072	0.144
敷居端居	3尺 3寸×3寸	3	0.027	0.081
引出鼻	6尺 3寸×1寸2分	1		0.022
”	1尺2寸	1		0.004
前 板	6尺 5寸×8分	1		0.024
側 板	1尺5寸 5寸×3分	12	0.00225	0.027
” 底板	1尺5寸 1尺3寸×3分	4	0.00585	0.023
羽目板	8尺 1尺×5分	3	0.040	0.120
胴隠及板受	3尺 2寸×1寸	8	0.006	0.0488
根太掛	6尺 3寸×3寸	1		0.054
根 太	3尺 1寸5分×1寸5分	8	0.00675	0.041
床 板	6尺 1尺×8分	3	0.048	0.144
障 板	3尺 ”	2	0.024	0.048
障木ノ裏	6尺 2寸×1寸	520	0.012	6.240
太 杵	6尺 2寸×2寸	2	0.024	0.048
合 計				294.279

4. 結び

スキーヒュッテを専用小屋として新設する機運は、1929、30年以降であり、1930年ハennes・シュナイダー²⁴⁾の来朝が拍車をかけることになるが、北海道ではすでに1926年竣工のティネバラダイスヒュッテから始まるヒンデル設計の一連のスキーヒュッテ作品が、その後のヒュッテ建設機運に大きな影響を与えた。ヒンデルの3部作以後、中山ヒュッテ(1928年)、朝里ヒュッテ(1929年)、奥手稲山の家(1930年)、無意根小屋(1931年)、冷水小屋(1933年)、余市ヒュッテ(1941

謝辞

本稿をまとめるにあたり、北海道大学大学院助手池上重康氏には史料探索で、また原稿最終調整で北海道大学大学院生角哲君にご助力いただいた。記して謝意を表する。

注記

- 1) 角幸博「建築家マックス・ヒンデルの経歴と作品について」日本建築学会計画系論文集No.465(pp.142-149)1994
- 2) 1929年に高松宮が「空沼小屋」(そらぬまこや)と命名するまでは、「からぬまこや」とも呼ばれていた。
- 3) 2月26日三井倶楽部宿泊後、旭川、釧路を視察後、3月2日ニセコアンヌプリ登山、3月3日チセヌプリ登山後、3月4日帰京した。
- 4) 大野精七伝記編集委員会『大野精七の歩み』(1981)、大野精七『北海道のスキーと共に』私家版(1971)
- 5) 1926年東京帝国大学卒業、1921年北海道帝国大学助教授、1924年北海道帝国大学教授(産婦人科学講座)、北大スキー部長、1931年北海道帝国大学医学部附属病院院長(～1933年)、1935年同大医学部長、北海道スキー連盟、札幌スキー連盟会長、1936年全日本スキー連盟副会長(～1940年)、1945年北海道立女子医学専門学校長、1948年北海道大学定年退職、1950年札幌医科大学長・同教授、北海道大学名誉教授、1961年札幌医科大学名誉教授、1968年北海道スキー連盟最高顧問、札幌スキー連盟名誉会長、宮様スキー大会終身大会長、1974年東日本学園大学学長などを歴任、また1973年秩父・高松・三笠の三宮家より米寿、1975年同三宮家より卒寿の祝を下賜された。
- 6) 北海道帝国大学文芸会スキー部15周年記念事業で建設されたヒュッテで、1926年7月10日起工、同年11月2日竣工、1994年倒壊。
- 7) ヒンデルとグラーの共同出資で山崎春雄北海道帝国大学医学部教授名義の個人ヒュッテ、1927年竣工、1934年北海道大学に寄贈、1985年改修。
- 8) 小川玄一「秩父宮殿下ヒュッテの竣工に當つて」、『山とスキー』第89号、1929.1.1)
- 9) 小川生(玄一)「謹述」、『山とスキー』第85号、1928.9.1)
- 10) 注8)と同じ
- 11) 注7)と同じ
- 12) ヒンデルは、1927年10月から現在の横浜市中区本牧溝坂で設計事務所を開設していた。
- 13) 『昭和参年度 空沼ヒュッテ新設工事関する書類』(以下「空沼ヒュッテ書類」)中、出任旅費領収書による。ちなみに出任旅費は、萩原正課長55円、村井栄吉属10円、原源太郎属10円であった。萩原については、池上重康、越野武、角幸博「北海道帝国大学の営繕組織の沿革と建築技術者について」(日本建築学会計画系論文集No.541(pp.213-219)2001.3)参照。村井栄吉は、盛岡市生まれ、1922年岩手県立工業学校建築科卒業後、北海道帝国大学営繕課勤務、1935年5月まで在職。原源太郎は、北海道留萌生まれ、1883年秋田県花輪町小学校卒業、大工見習いを経て、小樽小村茂三郎、札幌伊藤亀太郎の元で勤務後、1922年北海道帝国大学営繕課勤務、1933年3月まで在職。
- 13) 1863(文久3)～1944(昭和19)、北海道の代表的建設業伊藤組の創業者。新潟県三島郡出雲崎町大字尼瀬生まれ。父榮吉、母クニの第4子。1876年(明治9)大工金泉栄吉の

年)など、毎年のように建設されていった。

本稿は、ヒンデルのスキーヒュッテ3部作最後の作品である秩父宮ヒュッテに関して、北大所蔵史料から、建設過程、工事費、監理は北海道帝国大学営繕課雇原源太郎であったこと、創建時の室名および平面構成、使用木材量などを明らかにすることができた。北海道帝国大学営繕課で設計図を調製したとはいえ、ヒンデルの構想をそのまま受継いでおり、ヒンデルの作品として大過ないと考えたい。

もとで6年間従弟修行、1885年消息不明の父榮吉を探するため北海道に渡る。1890年小樽の小林茂三郎の元に勤め、1892年、小林札幌出張所を任される。翌年土木請負業者として独立。札幌(1908)、東北帝国大学農科大学林学科教室(1909)、札幌中央郵便局(1910)、手宮駅高架橋(1911)、室蘭機関車庫(1913)、北海タイムス(1922)、札幌独立基督教会クラーク記念会堂(1922)、北海道殖産銀行小樽支店(1923)、小樽駅(1934)などを請負う。

- 15) 真駒内御料地部落土場在の難降り人と思われる。
- 16) 『空沼ヒュッテ書類』中、ヒュッテ開き工事報告草稿による。
- 17) 当初計画は、以下のようであった。「準備 9月28日～10月3日/造材及製材 10月3日～10月30日/切組建方 10月14日～10月30日/内部造作 11月1日～11月10日/屋根工事 10月18日～11月3日/建具工 10月15日～11月10日/断片付 11月11日～11月13日」
- 18) 注7)と同じ
- 19) 宇都宮高「記憶の中より」、『山とスキー』第90号、1929.2.1)、『宮様スキー大会五十年史』財団法人札幌スキー連盟(1979.6)による
- 20) 朱書き訂正をした全文をあげる。「長くも殿下 御台庵を恭ふし御新設スキーヒュッテ開きの御儀を執り行はせ賜ふに當り工事の概況を御報告申上るを得るは洵に無上の光栄にして恐惶感激に堪へず 抑も當ヒュッテハ昨昭和三年二月長くも秩父宮殿下御来道親しく當地方をご視察あらせられ国民体育御奨励の御思召を以て我北海道帝国大学に御懇命を賜はりたるものにして道民の等しく大なる御思召に感激措く能はさるところなり 本工事の設計はスイスマックスヒンデル氏の原案に拠り地勢並に材料蒐集の都合を按配して計画を立て土地の選定等に関しては帝室林野局長大野本学スキー部長其他関係諸氏と協議の上昭和三年九月二十八日御用材伐採に着手し全年十月十七日工を起し全十二月十日全く竣工を見るに至れり 此延坪数十九坪八七三七工費五千五百円ヲ要せり 本工事は交通不便ニシテ材料物資の供給運搬等に少なからざる困難を極めたるに掲はらず當地方青年団軍人分会其他地方団体並に帝室林野局の援助と監督原源太郎及施工者伊藤亀太郎氏の犠牲的努力により遂成する事を得たりを感謝す茲こ二謹テ工事ノ報告ヲ為スニ當り深く謝意ヲ表ス右報告ス」
- 21) 安藤政三、伊藤信康「ヒュッテを利用する札幌附近のスキーコースに就いて」(北海道帝国大学スキー部「北大スキー部報」1) 1931.12.10)
- 22) 「石狩国札幌市豊平町札幌御料地内所在/空沼小屋 老/但備付物品/当宮より貴大学へ賜与相成候条比段申進候/昭和二十二年二月十七日/秩父宮附 子爵 吉田良兼/北海道帝国大学総長 伊藤誠哉 殿」
- 23) 『北海道大学所屬国有財産沿革』十二冊の内其十一
- 24) Hannes Schnider(1890-1955)、オーストリアのスキー術の創始者。弾丸滑降、制動クリスチニアを特技とするアルペルク・スキーを生み出し、一世を風靡した。1930年に来日し、日本のスキー術に新たな進路を示した。主著『スキーーツーリスト』(1913)、『世界大百科事典』平凡社、1988、『西洋人物レファレンス事典Ⅲ現代編』日外アソシエーツ(1984)

図-2 秩父宮ヒュッテ1階平面案
(北海道大学所蔵図面に室名など記入)

図-3 空沼小屋御設計図(北海道大学所蔵)

[2001年10月19日原稿受理 2002年2月18日採用決定]